



## 山で考えたこと

——ゴミ問題に触れて——

高 沢 光 雄

今年（一九七五）の七月に今西錦司氏が来道され、狩場山を手はじめに利尻山、チロロ岳、芽室岳、トムラウシ山を約半月ばかりの間に予定どおり登って帰られた。七十才をすでに越された高令であるが、生涯一、〇〇〇の山を登るのが目標で、狩場山は七九〇番目に登られた山であった。最近では日本の山のよさを見直して、一等三角点のある山を重点に登っておられる。一昨年は十勝岳、芦別岳、余市岳、大千軒岳などを、そして昨年は札幌岳、樽前山、夕張岳、カムイエクウチカウシ山、楽古岳を登られた。

ここで今西氏の北海道での登山歴を披瀝するわけではないが、自然保護に対する考え方は山雑誌「北の山脈」十二号（昭和四十八年十二月）に「今西錦司北海道語録」で大雪山縦貫道路問題や自然公園などについて「対談」で述べられており、また昨年、三十七年ぶりに日高山脈のカムイエクウチカウシ山（最初に登ったのは幌尻岳）に登られ、その紀行と自然保護の問題点について「北の山脈」十六号（昭和四十九年十二月）に寄稿されておられるので、氏の自然保護に対する考え方は省略するが、狩場山に登られた折りのことについて触れておくことにしよう。

狩場山は伊藤秀五郎氏が昭和三年三月に単身で東狩場山まで登られ、名著「北の山」に所載され、その折節の感動に魅せられて昭和三十七年五月に望月達夫、橋本誠二、石崎貞子の三氏とともに私も幸いに登ることができた。賀老台地から眺めた夕映えの狩場山、伊藤氏の文章に出てくる駅通の土台はまだ残

っており、そのまわりには水仙が芽生えていた。登山者としてあまりなかった無垢な山頂。千走温泉の印象など最初に出会った感激を大事にしてその後この山には訪れまいと思っていた。

今年には日本山岳会創立七十周年を迎え、全国各支部で記念山行が行なわれている。幸い会長の今西氏が来道されることになり、一部の支部員だけで全行程を同道するわけにはゆかず、分担することになった。狩場山に登ったことのある私に、その役がまわってきたのである。山行は本協会員である淡川舜平、早川禎治両氏の参加を得て実現することになった。今西氏は、狩場山登山のほかに、ブナの北限を確認することと、イワナとアメマスの住みわけを千足川で見出すことも含まれていた。ブナの木は幸い黒松内で見つけられ、非常に満足させておられた。アメマスも千足温泉のご主人から説明を聞かれ、これも実現できた。かつて賀老台地は開墾者が入植し農家が点在していたのであるが、全軒離農し朽ちた構造物が散在し、開墾地は荒れるにまかせてあった。一直線の道路だけは整備され、最近、島牧村で観光開発に力を入れはじめたのか、狩場山への登山路はつけられ、登山口の近くには駐車場まであって、近くの賀老の滝とともに名所として売り出している。登山路も立派に東狩場山をまいてつけられ、中腹まで登路の草刈り作業がおこなわれていた。大きなブナの木を今西氏は見上げながら、木肌をなせておられる。東狩場のまき道を、這松の幹や岩石を伝ってヒューヒューいいながら登る。どんな急な登りになっても速度はおと

ろえず、一定のペースを守っている。山頂近くの草原に出ると北嶺山方面から大勢の登山者が登っており、すでに頂上では所せましと憩っている。登山者のほとんどが農閑期を利用して団体でやってきた地元の人達で、老若男女がふだん着のままのほほえましきスタイルである。まさに、オラが山なのであろう。高山植物を手折って持っている人達が多い。頂上の三角点のまわりは、弁当の包み紙やジュースの空缶でちらかし放題である。日本人の悪いクセである花見跡の、公園のゴミだまり同様である。

歴然とちゅうちょしている、今西氏は率先してゴミを整理しはじめ、われわれはあわててゴミを袋詰めなどにしてきれいにす。清掃を終えて山頂で陣になり、今西流の万歳を三唱して昼食をとる。北海道の山の恥部をさらけだし、登山者として当然なさなければならぬことをした挿話であるが、山でのゴミ処理問題はなかなか苦慮することである。登山者のモラルは最近よくなったと思われるが、こうしたオラが山での高山植物の盗掘や、自分のテリトリーではどう汚してもかまわない、という意識は強いのでなかるうか。

交通の便がよくなり、リフトで頂上に登れるような山頂周辺は、きまって観光客の捨てるゴミの処理が大型化してくる。いま、国立公園内での入山料徴収が持ち出され社会問題となっているが、ことゴミの問題の多くは設備面と観光客にあって、登山者も反省する点はある。

今夏、日高山脈のチロロ川から北戸髯別岳と美生岳に登ってみた。幌尻岳まで足を延ばしなかったが、北日高の主脈を縦走してくる友人とポンチロロ川出合いで着合ふことになっていたので、実現できなかった。七ッ沼で泊ってきた友人は、あのきれいだつた七ッ沼のカルムも各所にゴミが目立ちはじめたと、嘆き悲しんでいた。ひと頃は大学のワンゲル部が、夏の日高山脈に競って入山し、大量の部員を投入して全山縦走に立ち向つた。ノコヤナタで這松を切りながら尾根に縦走路を切り開いていったと聞いているが、その名残りで簡単に歩けるようになったところもある。例の福岡大の「ヒゲマ遭難事件」でワンゲルによる全山縦走の目的は終止符を打つたと思われるが、ゴミ処理の問題はこ

れからである。

ひと昔前は高山植物を盗掘し、かくし持っているのではないかと、巡視員にザツクの中まで検査を受けた。これからはゴミを持帰ってきているかどうか検査されるべきで、入山票交付場所などに下山の際のゴミ置き場を明示するなり大いに啓蒙すべきであらう。登山者も下山時は荷が軽くなるので、ついでにはかのゴミも一緒にわずかながらも背負ってきて協力いただき、入山料と棒引にしてはいかがであらうか。

十月の休日に赤岩山に行つてみた。紅葉の盛りで快晴の青天と碧色の海を眺め、絶好の行楽日和であった。中赤岩では登山者が列をなし、どの岩場にも幾組ものパーティが取付いていた。釣人やハイカーも間断なく海浜に下つて行く。そのなかに特異なパーティがあった。札幌の「清岳会」である。設立者の前野 健氏ら一行は、各所に破棄されている空缶などを拾って、持参のビニール袋に詰めておられる。日の傾きかけた午後に、大きなゴミ袋を各人が背負つて峠の自動車道まで運んで帰られた。まったく頭の下がる思いである。赤岩山の清掃は町内会の若人達が自主的に奉仕されていると聞いていたが、こうも水族館やオタモイなど行楽地を擁した遊歩道では、心なき釣人やハイカー達によって虫ばまれていく。

前野氏は砂川から札幌に転動してこれ、札幌近郊の山はなんとゴミが多いのかと嘆かれてゴミ拾い登山を提唱され、私も最初は罪ほろぼしのため定山溪天狗岳と空沼岳のゴミ拾い登山に参加した。その後も毎年定期的な同様の奉仕登山をつづけ、各方面の山に足を延ばしていると伺っている。第二、第三の前野氏の出現を期待してばかりはいられない。前野氏が提唱しているように「せめて自分のゴミだけでも持ち帰るように」これは簡単なことのようにあるが、なかなかできないことである。山でのゴミ問題は、登山者の面目にかけてお互いが注意励行し、一人ひとりにゴミの持帰りを自覚させ、これ以上悪化させないことである。

(丸善株式会社札幌支店)